みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

繰り返される時間と流れゆく時間：マヤの暦とその世界観 (特集・暦の記号学)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5661

特集・暦の記号学

繰り返される時間と流れゆく時間

―マヤの暦とその世界観

八杉佳穂

一　はじめに

「原住民は文字も知らぬ野蛮人ではありましたが、後で述べますように、年月週日など時間の計算と祭日に関しては非常に正確な知識を持っていました。彼らの書物にはこれと同じく武功をはじめ戦争のたびごとの勝敗、歴代のおもな首長名、大嵐および空に現われた大変事の兆、国全体を襲った伝染病なども書き記され、これらがいつ、そして誰の治世の間に起きたかも書かれていました。」（モトリニーア、六一二頁）

メキシコ征服直後の一五二四年、布教に赴いたモトリニーア神父の言葉に表わされているように、マヤ文明やアステカ文明などが栄えたメソアメリカの古代人は、暦に関して異常とも思えるほどの知識をもっていた。暦は、それこそ日々の食事と同じくらい、日常生活になくてはならないものであり、歴史を記すためばかりでなく、年や日の吉凶や人の運勢を占うために使われていた。

いうまでもなく暦は、地球や天体の動きと密接に関係するので、世界観や天文にも関係する。それゆえ暦を扱う場合は、暦の仕組みだけでなく、宗教や世界観などにも言及する必要にせまられるが、ここでは、紙面の関係で、最初に暦の構造を概略し、次に、そうした暦に基づいた占いや予言の一部を紹介するにとどめたい。

二　暦の仕組み

メソアメリカの暦でもっとも基本となるのは、二六〇日暦と三六五日暦である。メソアメリカには系統の異なる言語グループが多くあるが、その多くが、それぞれ異なる名前で日や月を呼んでいる。しかし、その仕組みはいずれも同じである。とはいうものの、そうした暦を組み合わせて使うとき、言語グループにより、その組み合わせ方や利用の仕方が異なってくる。

二六〇日暦は、二〇の日付と一三の数字が組み合わさってできる暦である。二〇の日付をマヤを例にとって述べると、上表のような順になる。その順に一から一三までの数がついていくので、一イミシュ、二イック、三アクバルというように、日が表わされる。

東	北	西	南
赤	白	黒	黄
1 イミシュ	2 イック	3 アクバル	4 カン
5 チクチャン	6 キミ	7 マニック	8 ラマット
9 ムルック	10 オック	11 チュエン	12 エッブ
13 ベン	14 イシュ	15 メン	16 キッブ
17 カーバン	18 エツナッブ	19 カワック	20 アハウ

260日暦（20の日はそれぞれ順に東北西南の方角と赤白黒黄の色が割り当てられていた）

三六五日暦とは、二〇日がひと月となる月が一八に、名もない日とか不吉な日といわれる五日の日がついてできる暦である。一八の月とは、これもマヤを例にとっていうと、ポープ、ウォ、シップ、ソッツ、セック、シュル、ヤシュキン、モル、チェン、ヤシュ、サック、ケフ、マック、カンキン、ムアン、パシュ、カヤッブ、クムクで、その次に五日しかないワヤッブがくる。〇ポープ、一ポープ、二ポープというように日が過ぎていき、一九ポープでポープの月は終わる。次はウォ月で、〇ウォ、一ウォ、二ウォ……となる。

マヤ文明が栄えた古典期（三九二～九九年）では、この二つの暦が一組になり、一日が表わされていた。たとえば、四アハウ八クムクの日があると、次の日は、五イミシュ九クムクとなる。これはいうなれば循環暦であり、二六〇と三六五に最小公倍数である一八九八〇日（約三年）ごとに、同じ日が巡ってくる。

ここで三六五日暦の最初の日である元旦に、二六〇日暦のどの日が当たるかを考えてみよう。二六〇日暦の日は二〇日であるから、三六五を二〇で割れば、五あまり、一年ごとに五日ずれ、元旦に当たる二六〇日暦の日は、四つの日しかないことになる。アクバルが元旦の日であると、それから五日すぎのラマットが次の年の元旦に当たる。元旦に当たる日は、アクバル（アステカやミシュテカの暦では「家」）、ラマット

（「兎」）、ベン（「葦」）、エツナップ（「火打石」）しかないわけである。一方、日に付く数字のほうは、一三あるので、三六五を一三で割ると、一あまり、一年ごとに一つずつ数字が増えていくことになる。一アクバルの年の次は、二ラマットで、その次は三ベンとなり、四つの日と一三の数字の組み合わせで、年の名がつけられる。つまり搬年日があったのである。この暦であると、五二年で一周期の暦ができあがる。この暦を主に使っていたのが、ミシュテカやアステカの人々である。たとえば、ミシュテカで有名な「八の鹿、ジャガーの爪」王は、〝一二の葦の年の八の鹿の日〟に生まれた（アルフォンソ・カソの説では一〇二一年）。そして〝一三の葦の年の一二の蛇の日〟に（一〇五一年）、「一三の蛇、花の蛇」という女性と結婚した［Caso 1979］。このように日が表わされていた。

メソアメリカでは、自然の動きを暦として表わすようになったのは、紀元前五〇〇年から前二〇〇年のモンテ・アルバンⅠ期のことである。二六〇日暦と、三六五日暦が用いられたとみられるが、暦の文字をみると、ヘビやトカゲなど高地ではなく、熱帯低地に生息するものが文字となっており、その起源は、高地のモンテ・アルバンではなく、低地、すなわち、メソアメリカの最初の文明といわれるオルメカ（紀元前三五〇年～前二〇〇年）に求められている。

紀元前後になると、長期暦が現われる。長期暦というのはある日を基準にして、その日からたった日を数える暦である。言い換えれば、これまで述べてきた暦が、日夜が繰り返し、季節が巡り来るように、自然の繰り返す面を取り入れたものだとすると、長期暦は、時間の繰り返すことのない直線的な面を捕えた暦といえよう。これまでもっとも古い日付を刻む長期暦は、チアパ・デ・コルソで見つかった石碑に刻まれていた紀元前三六年のものである。これはとても重要である。なぜなら西暦以前に、西暦と同じような仕組の暦がメソアメリカで用いられていたからである。

この長期暦は、マヤ古典期に用いられて、発達を遂げた。長期暦は、バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンという五つの異なる単位から成り立っている。キンは一日であり、二〇キンで一ウィナルとなる。二〇進法に基づいて位があがるといってもいいが、トゥンのところだけ、一八ウィナルで一トゥン（三六〇日）ということになっている。

一キン＝一日
一ウィナル＝二〇キン
一トゥン＝一八ウィナル＝三六〇日
一カトゥン＝二〇トゥン＝七二〇〇日
一バクトゥン＝二〇カトゥン＝一四四〇〇〇日

これまで見付かっているマヤで最初の日付は、八バクトゥン、一二カトゥン、一四トゥン、八ウィナル、一五キンを刻むものである。暦の最初の日（暦元）からそれだけ経った、日数に直すと一二四三六一五日経った日である。現在もっと

も受け入れられている説によると、その日は、二九二年七月六日になる（マヤ暦はどう言うわけかすべてグレゴリウス暦に変換される）。つまり、暦元の日は、紀元前三一一四年八月一一日とされている。

この長期暦は、バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンという五つの異なる循環する周期の暦が積み重なってできた暦とも考えられるが、これだけでは完成しない。必ず、さきに述べた二六〇日暦と三六五日暦がつく。先に挙げた日付は、二六〇日暦の一三メンに当たり、三六五日暦の三シップに当たる。これを慣用的に次のように書く。

八・一二・一四・八・一五　一三メン　三シップ

これで長期暦は完成したといえるのであるが、ふつうこれに、夜の九王の情報や、月齢や二九日月か三〇日月かなどの月の情報が加わって、さらに複雑になってくる。

長期暦は、暦元の日からバクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンの単位を使って日を数えたものである。だから八・一二・一四・八・一五を年、一三メン三シップを月日とたとえると、分かりやすいと思うが、実際には、暦元から八・一二・一四・八・一五経った日を、二六〇日暦と三六五日暦でもう一度言い直しているわけで、言い換えれば、無駄の多い冗長度の高い暦といえる。これについては当のマヤ人も気付いており、だんだん省略した暦を使うようになる。

征服後に書かれた文書では、カトゥン八アハウとかカトゥン三アハウとか、カトゥンを省いて単に八アハウ、三アハウという表記法がみられる。これはカトゥンの終わりの日と二六〇日暦の組み合わせを利用したものである。カトゥンの終わりの日はアハウの日である。一カトゥンは七二〇〇日であるので、二〇の日で割ると、割切れ、必ずアハウの日となるのである。アハウに付く数字のほうは、一三あるので、一三×七二〇〇日（二六〇トゥン＝約二五六年）ごとに一周する暦ができる。征服後のマヤ人たちは、この暦で歴史を記していた。のちに触れる二五六年ごとに歴史は繰り返すという思想のもとになった暦である。

260日暦の文字（部分）

三　暦の予言、占い

「学識の最も高い神官が、書物を開いてこの年の吉凶を占い、それを参集者に告げるとともに、予言中に現れた凶事に対する対策を勧告して、若干の説教を行なった。」（ディエゴ・デ・ランダ、三六頁）

暦に基づいた予言には、大きくわけて、カトゥンの予言、トゥン（年）の予言、キン（日）の予言の三つがある。ランダが述べているように、書物、すなわち絵文書にそれは記されていたのであろうが、四つを残しすべて焼き去られた。しかし、『チラムバラムの書』と一括して呼ばれる、主にユカテクマヤ人の伝承をアルファベットで書き残した書物に、暦の占いに関する情報が残っている。

カトゥンの占いとは、二〇年ごとに巡ってくるカトゥンの占いである。それぞれのカトゥンには守護神がおり、二〇年の間に悪疫から逃れられるように祈った。同じ名のカトゥンには、同じような出来事がおこる。そうした歴史観に基づいた予言がなされていた。たとえば、『チラムバラムの書』の年代記のカトゥン八アハウと呼ばれる二〇年間は、いずれも滅亡のときであった。

八アハウ（六七二～六九二）　チチェン・イツァの放棄
八アハウ（九二八～九四八）　チャカンプトゥンの放棄
八アハウ（一二八五～一三〇四）　チチェン・イツァの再放棄
八アハウ（一四一～一四六一）　マヤパンの放棄

「いにしえの神官が、われらの神を崇めるのをやめる時がやって来ると予言した時は、いまだ来たっていない。いま時は三アハウである」といって、スペイン人の征服を最後まで逃れていたイツァ族のカネック王が、フエンサリーダとオルビータ神父の改宗の勧めを拒否したのは、一六一八年のことであった［Villagutierre : Lib. 2, Cap. 5］。三アハウとはカトゥン三アハウのことである。彼らの予言では、カトゥン八アハウがそのときであった。そのときまではまだ八〇年あまり間があった。イツァ族の滅亡は、二五六年あまりで巡ってくるその次のカトゥン八アハウ（一六七～一七七）の直前であった。暦の予言とほぼ時を同じくして、イツァ族は征服されたのである。

スペイン人の到来も予言されていたが、それはククルカン（ナワトル語でケツァルコアトル）の再来の伝説と結び付いた予言であり、アステカのモテクソマも、その予言に従い、征服されたといってもよい。

トゥンの占いとは、カトゥンのなかにある二〇トゥンのそれぞれの年の占いである。しかしトゥン（三六〇日）と三六五日暦の混同が、現在の暦を解説したものにもときたまみられるが、当のマヤ人も混同しており、カトゥン五アハウのそれぞれのトゥンを、さきに述べた、四つの搬年日で記している。この時代、古典期の搬年日の組と一つずれて、カン、ムルッ

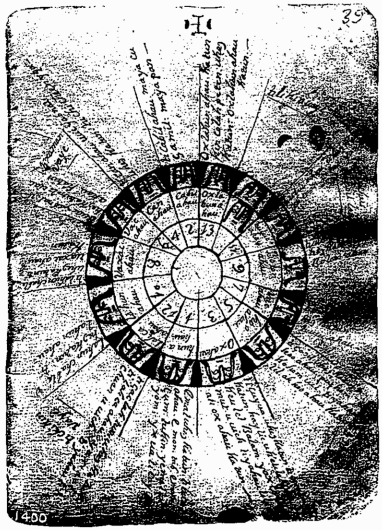
ク、イシュ、カワックとなっていた。

トゥンの占いは、「一三カン一ポプ、カトゥン五アハウの偶像（または皿）が新しく作られた」という句で始まり、一三カンの占いのあと、一ムルック、二イシュ、三カワック、四カンの占いへと進んでいく［Chilam Balam of Tizimin］。

一三カンの年はどういう年かというと、

「ケツァル鳥の子供、緑鳥の子供が降下するときである。女性側の子供の苦しみ、男性側の子供の苦しみの時となろう。大変な死と不幸のあるときである……」と、凶年である。

カトゥンの占いにしても、このトゥンの占いにしても、ほとんどが凶であり、マヤ人たちは、ひじょうに悲観的な人生観をもっていたようである。



カトゥンの輪（時計まわりにカトゥンがうちたてられる場所と簡単な占いが記されている）

日の占いは二六〇日暦に基づく占いである。日の占いには二つあり、一つは二六〇日暦の二〇の日の特徴や属性に基づいた占いで、生まれた日による人の占いと考えてもよいもので、もうひとつは一年の日々の占いである。

二十の日の占いのいくつかをあげてみよう［Barrera Vasquez 1942］。

マニックの日：オオム、緑鳥、山鳥がそのしらせ。カカオ、真のカカオがその木。その爪は血。またも凶。

ラマットの日：酔っぱらい。奇形の犬がそのしらせ。頭がジャガーで尻が犬。おせっかい。お喋り。不正直。互いに憎しみあう人。不和の種をまく人。大きい。

チュエンの日：木の工芸人。機織の工芸人がそのしらせ。すべての芸術の師匠。人生は大変富。やることすべてよし。思慮深い。

キップの日：アフ・シップがその知らせ。泥棒。生まれながらの狩人。勇敢。殺人鬼。行く末はよくない。凶。

いずれも難しく、解釈困難であるが、その人の人となりや運命が占われている部分があることがわかるであろう。

日には必ず数字がつくが、これには数字の部分がない。おそらく数字がつくことで、それぞれの占いの吉凶や行く末の占いなどの程度に差がついたのであろう。高地マヤのキチェ族の間では、二六〇日暦の日に基づく占いが保存されているが、それによると、若い数字は弱く、数字が十三に近づくに

従い、強く凶暴になるという［Tedlock 108］。そうした数に対する考えがこの占いに影響を与えていたにちがいない。

もう一つの占いである一年の日々の占いについて、『チラムバラムの書』から十二月のはじめを取り出してみよう。

	「ティシミン」	「マニ」	「カワ」
十二月一日	六カン	吉	凶 吉 吉 吉
十二月二日	七チクチャン	吉	凶 吉 吉 吉
十二月三日	八キミ		凶 吉 吉 吉
十二月四日	九マニック	凶	凶 凶 吉 吉
十二月五日	十ラマット	凶	凶 凶 吉 吉

日々が吉か凶か断じられている。しかし単に吉凶が記されているだけで、テキストにより吉凶が逆になる場合もあり、どのような仕組みで占われていたのか、また誰にとって吉や凶なのかも不明である。ランダによると、神官は洗礼の日が凶日にあたらないよう配慮したとあり（ランダ　三八頁）、おそらく、あることを行なう場合の吉凶の占いであったように思われる。しかし、人の生業によっても、吉や凶の日があったようである。たとえばアステカの商人にとっては、「一の家」または「七の家」の日がよい日であったし、「一のわに」や「七の猿」の日も縁起のよい日であった［Dibble and Anderson : Chapters 6, 7］。

【文献】

モトリニーア（一九七九）（小林一宏訳）『ヌエバ・エスパーニャ布教史』大航海時代叢書第二期四巻、岩波書店。

ランダ（一九八二）（林屋永吉訳）『ユカタン事物記』大航海時代叢書第二期三巻、岩波書店。

Barrera Vásquez, Alfredo (1942) "El pronóstico de los 20 signos de los días del calendario maya, según los libros de Chilam Balam de Kaua y de Mani." *Proceedings of the 27th International Congress of Americanists*. Mexico (1939) Vol. 2 : 470–481.

Caso, Alfonso (1979) *Reyes y reinos de la Mixteca*, II. Fondo de Cultura Económica, México.

Chilam Balam of Chumayel (1913) *The Book of Chilam Balam of Chumayel*. University Museum, Philadelphia.

Chilam Balam of Kaua (n. d.) Trascription by Ralph L. Roys, Middle American Research Institute, Tulane University, New Orleans.

Chilam Balam of Mani (1949) Códice Pérez. Imprenta Oriente, Mérida, México.

Chilam Balam of Tizimin (1980) *El Libro de Chilam Balam de Tizimin*. Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Dibble, Charles E. and Arthur J. O. Anderson (tr.) (1959) *Florentine Codex*. Book 9–The Merchants. University of Utah Press.

Tedlock, Barbara (1982) *Time and the Highland Maya*, University of New Mexico Press.

Villagutierre Soto-Mayor, Juan de (1985) *Historia de la conquista de la Provincia de El Itza*. Condumex, México.

（やすぎよし）ぢ・中米言語学）